



渡邊 勝彦さん

昭和31年摂津市生まれ摂津市育ち。両親は農業を営んでおり、幼い頃から農業に触れて育つ。大手ハウスメーカーの内定を辞退して昭和54年摂津市役所に技術職（土木職）として入庁。市役所では上下水道事業などに尽力。平成28年に退職。令和5年から農業委員会会長を務める。令和5年、㈱アグリズム摂津を設立。農業を次世代につなげる活動などを続けている。

せつつの農業を盛り上げたい

「鳥飼八町で長く農業に携わってきましたが、令和5年3月に「株式会社アグリズム摂津」を設立されました。まず、法人化を決定されたきっかけやその背景について教えてください。」

「摂津の農業を次の世代へつなげていきたいと思い、法人化を決定しました。私は鳥飼八町で生まれ育ち、幼い頃から農業に親しんできました。また、市役所勤務の経験が長いこともあり、市が抱える課題について多少理解しています。今は農業委員会会長という立場もあり、ここで地域のためにがんばる使命があると感じています。」



鳥飼八町は市街地に近い場所でありながら田園風景がひろがる。

「地元へ貢献し、摂津の特産品を活用して地域を盛り上げたいという思いがあります。『鳥飼なすワングランプリ』というイベントでは、市内の飲食店へ鳥飼なすを提供しています。これは、飲食店が鳥飼なすを使ったメニューを提供し、食べた人が投票して、一番人気のメニューがグランプリになるというイベントです。このイベントのよう

農業の現実を伝えていく

「仲間とともに、現在進行形でさまざまなアイデアや取り組みを模索しています。」

「現在どのような農作物を手がけていらっしゃるんですか。」

「米を1万5千㎡、鳥飼なすを500㎡、四季折々の野菜を500㎡ほど育てています。他にも、JA北大阪からの受託業務

で耕うん、田植えなどを行っています。」

「農業を学びたい人の受け入れも積極的に行っています。例えば、『SFC※』の卒業生は年間2〜3人ほど受け入れています。また、大阪府農政室からも依頼を受け、就農を学びたい人を受け入れています。今年度には3人が参加しており、年齢層は20代から50代まで幅広いです。医療従事者や飲食店経営者など、これまでの経験や業種もさまざま。その背景には『自分で育てた農作物を食べたい』という強い思いがあります。都市部で農業を実際に体

験できる場は限られている中、鳥飼八町は都市部に近くアクセスが良かったため、学ぶには適した環境なんです。」

を抱えています。周囲には兼業農家が多く、専業農家として生計を立てるためには、米作りの場合だと約20万㎡ほどの田んぼが必要になります。それだけ広大な土地での米作りは現実的に難しく、農業で食べていくことは難しいのです。」

「鳥飼八町という土地で農業を営む中で、地域が抱える課題や問題についてどのように感じていますか。」

「鳥飼八町も、他の地域と同様に高齢化や後継ぎ問題といった課題



渡邊さんの事務所にはいろいろな人が相談事を持って訪ねてくる。インタビュー中も電話に、訪問対応にと忙しそうだった。



摂津市の誇る伝統野菜「鳥飼なす」も栽培。「鳥飼なすワングランプリ」で使用するほか、首都圏の料亭からも支持されている。



朝のミーティングで、農作業の工程をみんなで共有する。慣れた様子でそれぞれが自分の仕事に取り組む。

しい状況にあることを伝えるのも、ある意味では使命だと考えています。」

「また、鳥飼八町は市街化調整区域※であるため、農地として活用するしかない課題があります。一方でこのエリアは都市部に近いという大きなメリットもあるため、そうした利点を生かした取り組みを模索しています。その一環として、JA 北大阪と共同で『WE米®』という商品を手がけています。このWE米®は腸内環境の改善が期待できる商品です。市内の小中学校の給食用パンにも活用されており、子どもたちからも『おいしい！』という声が多く寄せられているのが非常にうれしいです。こうした取り組みを通じて地域とのつながりをさらに深めていきたいと思っています。」

※市街化調整区域とは、無秩序な市街化を抑制し、農地や緑地を保全するため、開発が制限される区域

地産地消の持つ力 100%摂津産に

―今後の夢や展望について伺います。農業を通じて実現したい夢やビジョンがあれば教えてください。



鳥飼東小学校の児童が植え付けた白菜。渡邊さんは「地産地消の取り組みを理解してくれたら」と目を細める。

「私の夢は、摂津市で100パーセントの地産地消を実現することです。少なくとも、自分が食べるものは自分で農作物を育てて作れるような環境を目指したいと考えています。」

「都市部に住んでいても、私と同じように地産地消を実現しようという考えを持つ人々が増えていくのを実感しています。特に、ウクライナ情勢や令和の米騒動といった出来事をきっかけに、日本の食料問

長していく様子がいいんでしょうね。農業という活動が、障害者や高齢者にとつて、心身の健康維持にもつながっていることを実感しています。」

―米の収穫後の畑では、これからレンゲの花が咲き誇るといいますが、この土地ならではの魅力や風景についても伺いたいです。

「はい、米の収穫が終わった後には、レンゲの種を蒔いています。そして春になると、畑一面にレンゲの花が咲き誇り、まさに『映えスポット』に。ぜひ多くの方々に見に来ていただけたらと思っています。レンゲの花を活用する養蜂も予定しています。実は以前、レンゲ蜂蜜が品評会で4位を受賞したほどの高品質だったんですよ。」

「咲き終わった後のレンゲは次の農作物の肥料として活用されます。レンゲは自然に土へと還り、次のシーズンの米を育てるための栄養を土壌に与えてくれます。私が目指す『循環型の農業』の形です。」

農業で叶える

鳥飼八町の未来

―最後に、農業を通じてどのような



母屋を改装してデイサービスとして活用。庭や畑を利用して心や体の健康を回復・向上させる園芸療法を取り入れている。施設名「満さん家」は、渡邊さんの亡母に由来。

題について考える機会が増えたのではないだろうか。そうした流れもあり、私自身、地産地消に対する思いをさらに強く抱くようになりました。」

「いつか米の有機栽培を成功させたいです。一度挑戦したことがありますが、結果は散々でした。しかし、それ以降経験を重ねてきましたので、あきらめずに、化学肥料を使わない循環型の肥料で栽培する方法を探ってみたいです。」

可能性を見出そうとされているのか、お考えをお聞かせください。

「新事業として『お野菜配達便』を始めます。市内で収穫した新鮮な野菜を地元の飲食店に直接配送することで、地産地消の取り組みを広げたいのです。この仕組みに賛同していただける飲食店の皆さんにお声がけをしながら、地域全体で農産物の価値を共有できる環境を築きたいと考えています。」

「また、鳥飼八町1丁目では、WE米®をはじめとする地元の米や鳥飼なすなどの農作物を積極的に栽培しています。一方で、鳥飼八町2丁目では市民農園を中心としたさまざまな人が集える場所を構想中です。この土地を有効活用し、地域の人々の交流や農業体験を通じて、農業の持つ社会的な価値を広げる場を作りたいと思っています。」

「これまでの農業にとどまらず、新たな農業の形を模索し続けることで、地域や社会全体にとって新しい価値を提供していきたいと考えています。」

シニアプロフィール
サイトで他の人々の
インタビュー記事を
掲載しています▼



春にはレンゲ畑が広がる。「自由に見学してもらっている」と渡邊さん。



農福連携、 農業と福祉がつながる

―障害者や高齢者が農業分野で活躍できる社会参加や自立を支援する「農福連携」にも取り組まれていますよね。その活動の背景や成果についてお聞かせください。

「はい、複数の就労継続支援B型事業所と連携して活動しています。」